

中世の歌人たち

佐佐木幸綱



NHKブックス

251

佐佐木幸綱 (ささき・ゆきつな)

1938年 東京に生れる

1963年 早稲田大学国文学科卒

1966年 同大学院修士卒

現在 歌人〈歌誌「心の花」編集・現代歌人協会理事〉

跡見学園女子大学講師・早稲田大学講師

著 書 歌集「群衆」「直立せよ一行の詩」

評論集「萬葉へ」

NHK ブックス 251

検印廃止

中世の歌人たち

昭和51年4月20日 第1刷発行

昭和53年2月20日 第2刷発行

著 者 佐佐木 幸 綱

発行者 藤根井 和 夫

印刷 三 秀 舎

製本 三 森 製 本

装幀 桒折久美子

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1

郵便番号 150 振替東京 1-49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします

中世の歌人たち

佐佐木幸綱

NHKブックス

251

©1976 Yukitsuna Sasaki

目次

序 章 中世の詩歌……………	9
中世と現代 中世和歌の特質 俊成と西行 新 古今集及び新古今歌壇 新古今集以後	
第一章 建礼門院右京大夫……………	34
右京大夫の一生 すなおさ 悲しみをみつめる心	
対談 王朝から中世へ ゲスト 竹西 寛子……………	40
王朝と中世の女流歌人の比較 ゆめ・うつつの世界	
第二章 式子内親王……………	48
華麗なる孤独の世界 「もみもみ」とした詠いぶり 題詠歌としての恋の歌	

対談 従来と異なる式子像

ゲスト 竹西 寛子…55

抑えて高揚する情緒 定家との恋の伝説

第三章 藤原 良経

63

『新古今集』巻頭歌 武士の世を生きる貴族

対談 天才歌人良経

ゲスト 藤平 春男…70

『秋篠月清集』から 新古今歌壇における良経の歌風

漢詩文の素養

第四章 後鳥羽院

81

意志的な精神 新しい時代文化の創造 承久の乱の

敗北―隠岐島配流

対談 新古今歌壇に聳える帝王

ゲスト 塚本 邦雄…89

文学における自己主張 後鳥羽院と『新古今集』

第五章 藤原 定家……………97

及ばぬ高き姿をねがいて 現実を超えた文学世界
恋の歌の名手

対談 新風をめざした鬼才……………ゲスト 塚本 邦雄…104

重層的な効果 後鳥羽院と定家
とばゝの問題 〈こころ〉と〈こ

第六章 源 実朝……………113

新古今歌壇から離れている歌人 孤立する若い魂
幾重もの闇

対談 精神の自由を求めて……………ゲスト 有吉 保…120

実朝調和歌 空想世界の旅 和歌本来の叙情世界

第七章 宮内卿……………129

若草の宮内卿 若い才能の苦悩 新古今調の恋の歌

対談 新古今歌壇の申し子

ゲスト 馬場あき子…136

視覚的な歌 野の花と心の花 対象をみつめる視線

第八章 俊成卿女…

145

恵まれた文学環境と不遇な実生活 本歌取の名人

対談 普遍的な世界への指向

ゲスト 森本 元子…152

文学の世界への信頼 歌合と中世和歌の関係

第九章 阿仏尼…

160

学問に裏付けされた自信 為家との出会い へ歌の

家へをめぐる対立

対談 男まさりの女流歌人

ゲスト 馬場あき子…168

恋の歌のリアリティ 人生の契機としての旅

第十章 京極 為兼…

176

対立の時代 へこころへの重視 自然へ向くへこころへ

対談 革新の歌人

ゲスト 有吉 保…182

発見の和歌 伏見院中心のサークル

第十一章

永福門院………

190

心やさしさとよくよかさ 〈時間〉の推移を見つめる
眼

対談 玉葉歌壇の旗手

ゲスト 森本 元子…196

素直な自然詠 作歌環境と歌の関係 歌壇の対立

第十二章

正 徹………

204

多作家正徹 自由大胆な表現 関係性において世界
を捉える

対談 定家の継承者

ゲスト 藤平 春男…212

幻覚の世界 定家への傾倒 中世初期歌人との相違

序章 中世の詩歌

中世と現代

二年ほど前、私は〈中世〉に触れて短い文章を書いたことがあった。〈中世〉という時代を身近かな、現代の問題として意識しはじめたごく最初の頃の文章である。私には、中世の歌人たちの営為を、外野席から眺めるように、現代とは関係のない世界のそれとして眺めることはできない。本書も、中世の歌人たちの生き方と詩が、われわれにとつて他人事ではないとの視点に立つて書いてゆくことになるが、どこがどう他人事ではないのか、その辺りの私の関心の根の部分、その文章の一部によってまず知っていただきたいと思う。

中世を思うとき、いつでも思い起こす絵の一場面がある。十二世紀末の筆と推定される東京国立博物館本（旧河本家本）『餓鬼草紙』第二段の絵である。描かれているのは出産の場面で、出産の場面が描かれたものは日本の絵画史上極めて珍しいという。母親は中級貴族の妻であろう。中央のし

とねに今生れたばかりの嬰兒が描かれ、それを囲むようにして無事出産の喜びを顔と体全体にあらわす五人の下女、そして産婆がいる。あたりには用済みになった幾つかの手桶。左手の戸を開けて部屋をのぞき込んでゐる若い男は、父親の隨身、無事出産を伝える伝令役でもあらうか。一人の女は、産室右手の戸から次の間に半身をのり出して、数珠を持つ安産祈禱の坊さんに嬉しそうな顔で声をかけてゐる。無事出産にわく、当時普通の中級貴族の家の描写であらう。

しかし、喜びにわく画面の登場人物たちの目には見えないのだが、前かがみになって、うかがうような姿勢で嬰兒の方へ両手を伸ばす奇怪な生きものがいる。逆立つ髪、骨と皮ばかりの長い手と足、異様に脹れた腹。かっと見開かれた目は嬰兒を凝視し、伸ばされた手は今すこしで嬰兒にとどきそうだ。餓鬼である。この餓鬼は、『正法念処經』餓鬼品第二十種、伺嬰兒便餓鬼と呼ばれる餓鬼で、前世で自分の子を殺され、その怒りが嵩じて餓鬼となったもので、出産現場を探し出してはその嬰兒の便を喰い、その命を断つという餓鬼である。

言うまでもなく、『餓鬼草紙』は『地獄草紙』等とともに、因果応報の恐しさを教化する目的で描かれた六道思想の絵ときである。だが、描かれた意図はどうあれ、この誰ともわからぬ絵師が描いた絵のすさまじい希望のなさ、非未来のイメージは、現代のわれわれをも激しく恐怖させる。未来の一切は、人間の感知し得ぬ何か、たとえば餓鬼の食欲によって芽のうちに喰いつくされてしまふのだ。人間はすべて盲目である。喜びは束の間の錯覚。希望は絶望へ向かう過程でしかない。この絵は私たちにこうささやきかける。

中世を生きた人々の人間把握の根底のところにくうした認識があつた、と私は思う。この認識が

浄土宗その他の中世仏教へ人々を向かわしめたのであり、同時に、戦場においては、あるいは政治的謀略の場面での、無数の殺人者の原動力ともなったのではなかったか。それは、無常というよりももっと切迫した手触りの、絶望的世界観であつたろう。『平家物語』が時間の流れに沿って展開してみせた世界を、現にそこに生きる人間は、時間の長さを折りたたんだかたちで、重なり合ったものとして感得せざるを得なかっただろうからだ。現在と折り重なった未来。現在は未来の重みに押しつぶされ、人はその重みに耐えて生きねばならないのだ。

〈中世〉の秀れた歌人たちは、現実をおりることでの重みを魂の問題として受けとめようとした。三代將軍実朝は、建保四年（一二二六）から翌年にかけて、五ヶ月の月日と莫大な費用を費やして陳和卿に巨船を建造させたが、船は水に浮かなかつた。

承久三年（一二二二）、後鳥羽院は、院宣を発して、北条義時追討の挙兵に踏み切つたが、院のもとに集つた武士はわずかに千七百、たちまちのうちに打ち破られた。

実現は、最初から断念されていた、と思われるふしがある。実朝の渡宋、後鳥羽院の政權奪取、彼らはその実現ではなく、計画をイメージすること自体に情熱を燃やしていたにちがいない。計画中止を忠告する者たちがむろんいた。しかし、二人は一気に失敗へ向かつて走つた。稀有な才能を持つたこの二人の歌人は、血と境遇ゆゑに現実をおりきれぬ自らに断念を強いたとは解せられまいか。

アウトローとして生きようとした西行にはこんな歌がある。

花にそむ心のいかで残りけむ捨てはてゝきと思ふわが身に

うちつけに又こむ秋のこよひまで月ゆゑ惜しくなる命かな

西行は、断念しきれぬ自分、未来を信じようとする自分、それを自然ゆえのこととして必死に時代社会を否定する姿勢を守ることでの上の問題をひき受けようとしているのである。そして、うちつけに惜しくなる命と表現することで、じかに魂の問題を露呈させ、現在の重みを照らしているのだ。また、

亡きあとをたれと知らねどとりべ山おのおのすぎ塚の夕暮

いづくにかねぶりねぶりをたふれふさむと思ふ悲しき道芝の露

と西行は無常をうたう。亡き誰かは、悲しき道芝は、現在の重みを負いつつ現実に賭けた命たちのことを指しているだろうし、自分の命もそれに重ね合わせているにちがいない。西行は、自らの断念を通して、どのように生きてても時代からは逃れられないという冷徹な自覚と、時代を一步脱しようとする方向性をもつ魂とを獲得するのである。

すさまじい情熱で虚に賭けた定家、ふき上げる感情を押さえて耐えぬいた実朝。いずれも否定と断念の背骨を通すことで非価値、非未来の時代の歌を詠いあげたのだった。

中世が確実に、徐々に近づいて来るといふ感覚。私の場合、それはあの『餓鬼草紙』の一枚の絵がわれわれの現実と重なり合つて来る無気味な感覚である。人間たちは喜びに沸いている。それを

うかがう一匹の餓鬼。逆立つ髪、細長い手足、異様に脹らんだ腹。しかし、私たちの目には餓鬼が見えない。中世と現代は、実は、意外に近い距離にあると私は思う。中世の歌人たちの営為を、だから、他人事として見ることは私にはできないのである。（中世が確実に近づいている）『読書人』昭48・10・15）

中世和歌の特質

大ざっぱに言つて、十二世紀末——平家滅亡、鎌倉幕府の成立から、十六世紀末——室町幕府滅亡までのおよそ四百年ほどを「中世」と呼ぶ。鎌倉時代、南北朝時代、室町時代と通称される各時代がこの中に含まれる。貴族中心の荘園制度が破綻を来し、いわば不在地主であつた貴族層は浮き上がったかたちになり、在地の直接土地管理者であつた地方豪族、新興武士階層が実権を握り、中央政界に進出した。守護地頭制度と呼ばれる武家中心の荘園制度の時代である。形骸化しつつも名目的には受け継がれて来た律令政治に終止符が打たれ、幕府政治が開始された。

乱世とも呼称されるこの時代は、武家、公家、そして地方豪族層三すくみの冷たい戦争を基底部に置いて、源氏・平家の合戦、南北兩朝の抗争を二つのピークとする熱い戦争が絶え間なくくり返された時代であつた。公武対決の承久の乱、地方豪族間の土地争い等、この時代の抗争をいちいち挙げていったらきりが無い。この間、源氏、北条氏、足利氏と、武力によって中央集権のトップに立つ將軍は存在したものの、安定した政治を行ない得た期間はごくわずかであつた。これは、基本的に暴力によって保持された政権のいわば宿命であつて、したがつて、この時代、四百年という時間は決して短い時間ではないが、中世という字義通りの過渡期的性格をまぬがれ得なかつたのであ

った。

時代社会がどちらの方向へ向かつて動いてゆくか見極め難い時代であつた。実生活において、現実主義、暴力主義が幅を利かせた時代である。中世は宗教の時代であるとも言われるが、このような時代であつて人々に宗教が求められるのは当然であらう。はかなく潰え去る人間の生命、現実社会の不確かさ、『方丈記』を、『平家物語』を、『徒然草』を見ればわかるように、現実主義、暴力主義の限界を身に沁みて知らざるを得なかつたこの時代の人々は、現実にはない確かな手触りを宗教に求めたのであつた。天台宗、真言宗等旧仏教も依然として幅広い支持を得てはいたが、熱烈なる支持を受けたのは、この時代状況の中から生れた新仏教であつた。法然によつて開かれて間もない浄土宗、親鸞の浄土真宗、日蓮の法華宗、庶民階層の信仰を得た一遍の時宗、さらに柴西の力で武士階層に浸透した中国渡来の禅宗等、仏教がこの時代ほど切実に人々の心を捉えた時代はなかつたのであつた。

しかし、宗教によつて一切が解決するわけではない。宗教には托しきれない精神の領域がある。歌人たちは、短歌という詩の形式に、現実にはない確かな手触りを求めたのであつた。

中世和歌の特質を一言で言えば、理念追求の詩と言えるのではなからうか。詩どころがわいたから歌を詠む、私的な楽しみとして歌をつくるといった趣味的傾向は稀薄であつて、精神主義的な色彩が濃厚である。文学によつて人は救済されるか、作歌によつて人は本来的な意味で慰藉されるか。あらためてこう言うといささか大げさな気もしないではないが、中世和歌には、こうした人間の精神の問題としてきわめて切実な問いかけが見られるのは確かなところである。私はこれを中世

和歌に顕著な二つの作品傾向と二つの姿勢に見てとる。

①

前者、二つの作品傾向は、西行あるいは正徹等に見られる思想詩的傾向の作品と、俊成の幽玄、定家の有心体等、歌の理想の實現を目ざす作品とにその二つの典型を見ることができよう。思想詩的な和歌は、万葉集の時代からすでにあることはあるのであって、政治的思想詩人としての入麻呂、社会派的思想詩人としての山上憶良、アウトロー的思想詩人としての大伴旅人等がすぐ思い出されるのであるが、中世の歌人たちはその伝統を継承しつつ、この時代独自のそれを実現したのであった。多くは述懐歌というかたちをとったが、万葉歌人とは比較にならないくらい死を身近かに感じざるを得ない乱世に生きた中世歌人たちは、それだけ深く人間の生と死の問題に思想の錘鉛を下したのであった。前に掲げた西行の歌のどれもが、直截に生と死に直面しつつ、その一点から広がる心情の波紋を思想的に收拾するうたい方をしていたのを思い返して欲しい。

また、短歌形式で思想をうたうことと、表われ方としては背反しつつ根の部分で通じていたのが、短歌形式を思想的に捉える行き方である。歌は——広く文芸はと言ってもよいのだが——、何ものかに従属するものではなく、それ自体自立し、完結すべき一個の世界である。とするならば、そこには独自の理想および方法があつてよいはずであり、その理想、方法をより純化してゆくためには、あらゆる夾雑物、例えば現実をもそこから放逐すべきであると捉えるのだ。定家の言を借りれば、「歌の本意と存する姿」(『毎月抄』)、「及ばぬ高き姿」(『近代秀歌』)といった歌の極北を仰望しつつ、一步でもそこへ近づこうとする試みが作歌なのであり、その極北に照らし合はされることで他の一切は相対化されるのである。こう考えれば、現実である乱世も、無常を感じとる人間の